

【論 説】

螻蛄の斧

—— 古代ギリシア都市国家の民主化とペルシア戦争（上） ——

敬 一 的 射 場

目 次

はじめに

1. アテナイの発展と民主化
 1. 1. 重装歩兵と密集方陣の戦いの登場
 1. 2. ソロンの改革
 1. 3. ペイシストラトスの僭主政
2. イオニアとオリエント世界
 2. 1. イオニア植民都市ミレトスとミレトス学派（以上、本号）
（以下、次号）

はじめに

真に強大な敵に対して微弱な力でもって勝ち目のない戦いを挑むことを「螻蛄の斧」という。これは『莊子』の「人間世篇」に出てくる逸話を元にした故事であり、カマキリ（螻蛄）が目の前に迫る車輪に対し無謀にもその前足を振り上げて立ち向かおうとする様を表している。紀元前499年、アナトリア半島（現・トルコ）の南西部、エーゲ海に面したイオニア地方の都市国家群が、宗主国であったアケメネス朝ペルシアに対して起こした反乱（イオニアの反乱）は、まさしく「螻蛄の斧」であった。

その当時、既に古代オリエント世界（古代メソポタミア、古代ペルシア、古代エジプト）を統一していたペルシアは、大王ダレイオス一世の下で、東は北西インドのガンダーラ、西はマケドニアにまでその版図を拡大させていた。ペルセポリス（現・イランのほぼ中央部に位置する）を首都としていたペルシアに

とって、エーゲ海を取り囲むアナトリア半島西岸とバルカン半島（ギリシア本土）は、西の果ての一辺境地帯に過ぎなかった。紀元前 800 年頃にギリシア本土のアッティカ地方に集住し、都市国家アテナイを築いたイオニア人（古代ギリシア人の一集団）が、エーゲ海を渡ってアナトリア半島西岸に入植し、建設したのが、ミレトスをはじめとするイオニア地方の都市国家群である。このギリシア人の植民都市国家群は、紀元前 560 年に、アナトリア半島西部を拠点とするリュディア王国の支配下に入り、さらに紀元前 546 年にアケメネス朝ペルシアがリュディア王国を滅ぼすと、ペルシアの軍門に下った。そして、ペルシアに服属してからおよそ半世紀が過ぎた頃、ミレトスを中心として突如として反乱を起こし、完膚なきまでに叩き潰されたのである。

反乱勃発から 5 年後、紀元前 494 年にミレトスは陥落する。イオニアの反乱を主導したこの都市国家に対するペルシアの報復は、他の諸都市への見せしめという意味もあり、凄惨を極めた、と歴史家のヘロドトスは伝えている。「大部分の男子は長髪貯えるペルシア人の手にかかって殺されるし、女子供は奴隷の境遇に落とされ、ディデュマの聖域は神殿も託宣所も掠奪と放火を蒙った⁽¹⁾」と。反乱に加担した他のイオニア諸都市にも容赦のない鉄槌が下された。ペルシア軍は「イオニア諸市を制圧するや、特に美貌の少年を選んで去勢し男子の性を奪い、器量のすぐれた娘を親許から引き離して大王の宮廷に送った。…さらに各都市に火を放ち聖域もろとも焼き払った⁽²⁾」と伝えられている。

完全な失敗に終わったこの無謀な蜂起は、しかし、ペルシアの覇業を伝える数多のエピソードの一つに終わらなかった。ギリシアの二つの都市国家が、イオニアの援軍要請に応えたからである。一つは、エレクトリアであり、彼らはかつて隣国との戦争の際、ミレトスの援助を受けた恩義があった。もう一つは、当時のギリシア世界で「スパルタ以外の諸国中では…最強であった⁽³⁾」アテナイである。イオニア諸国とエレクトリアそしてアテナイの連合軍は、エベソスにおける戦いでペルシア軍に鎧袖一触に打ち破られ、エレクトリアの指揮官はこの戦いで戦死した。アテナイも軍を退き、以降はイオニアの救援要請に応えることはなかった。ミレトスの陥落後もイオニアの諸都市は抵抗を続けたが、遂に反

乱勃発から7年後の紀元前493年に完全に平定される。そして、その3年後の紀元前490年、ペルシアは大軍を擁して、アテナイとエトレリアの征討に向かった。そして、「歴史」が始まる。

「歴史の父」と呼ばれるヘロドトス（前485年頃-前420年頃）が、現存する最古の歴史書である『歴史』を著した直接の動機は、このペルシアによるギリシア征討であった。『歴史』冒頭で、ヘロドトスは以下のように述べる。

本書はハリカルナッソス出身のヘロドトスが、人間界の出来事が時の移ろうとともに忘れ去れ、ギリシア人や異邦人の果たした偉大な驚嘆すべき事績の数々とりわけて両者がいかなる原因から戦いを交えるにいたったかの事情—も、やがて世の人に知られなくなるのを恐れて、自ら研究調査したことを書き述べたのである⁽⁴⁾。（ヘロドトス『歴史』巻1の1）

後にペルシア戦争と呼ばれる、このペルシアによるギリシア遠征は、確かに「偉大な驚嘆すべき事績」と称されるに値するものであった。ペルシアは世界帝国であり、辺境の一民族である「ギリシア人にとっては、ペルシア人という名を聞くだけでも恐怖の種となっていた⁽⁵⁾」。実際、最初の攻撃対象となったエトレリアは、イオニアの諸都市と同じ運命を辿った。エトレリア側には「出撃はもとより迎撃する意図もなく…何とかして城壁を守ることに専念していた」。攻撃開始から7日目にエトレリアの有力者2人がペルシア側に寝返り城門を開けたために、「ペルシア軍は町に侵入し、かつてサルディスで彼らの聖域が焼き払われた報復とばかり、聖所を掠奪したうえで火を放ち、ダレイオスの命じたとおり市民を奴隷にした⁽⁶⁾」。ところがアテナイは、マラトンに上陸したペルシア軍2万を、重装歩兵による駆け足突撃という奇襲でもって撃退し、ペルシアに帰投せしめた。その10年後の紀元前480年、ダレイオス大王の子のクセルクセス一世が（誇張された数字とされているが、ヘロドトスの記述によれば）530万という大軍で再度ギリシアに侵攻する。しかし、アテナイは本拠地を奪われながらも抵抗を続け、サラミスの海戦でペルシア海軍を打ち破ると、クセルク

蟻螂の斧（的射場）

セスは戦意を喪失し、ペルシア軍は退却した。以後、何度か小競り合いが続くものも、紀元前 449 年に和睦が成立したと伝えられている。

ペルシア戦争の歴史的意義は、蟻螂の斧が迫り来る車輪に一撃を与えたというだけに留まらなかった。それは、アテナイの民主政が歴史の表舞台に飛び出た瞬間でもあったのだ。イオニアの反乱に先立つこと 10 年前、アテナイ市民は、ペイシストラトス家による僭主政を打倒し、民主政を樹立させていた。それは下からの革命というよりも、有力貴族間のヘゲモニー争いの結果であったとはいえ、アテナイは歴史上初めて全市民が政治に参加する法と制度を整え、市民の誰もが自由人であるという自負と確信をもって国政を運営し始めていた。イオニアの反乱は、ミレトスの僭主代行アリストゴラスの個人的野心から始まったものの、彼は僭主に支配されていたイオニア諸都市に民主政を広めるという仕方でも各都市からの支持を得た。つまり、ペルシアへの反乱は、僭主政の廃止と民主政の樹立という政治改革と連合したからこそ、イオニアのギリシア植民都市全体に燎原の火のように広まったのであり、だからこそ、反乱の主導者であるアリストゴラスの戦死とミレトスの陥落後も、諸都市は頑強に抵抗を続けたのである。ペルシアによる従属国の支配はそれほど過酷なものではなく、求められたのは朝貢と戦費の負担くらいであった。それでもなおイオニアの諸都市とアテナイが無謀にもペルシアに立ち向かったのは、服従と安全ではなく、自治と自由すなわち民主政をギリシア人たちが選び取ったからである。したがって、ペルシア戦争の勝利によって命脈が保たれたのは、ギリシア人たちの独立のみならず、民主政という理念そのものだった。

アテナイにおける民主政の揺籃期、すなわち国政が種々の改革と政争によって、貴族政から僭主政へと移行し、最終的に民主政樹立に至る期間は、世界史的に見て大帝国の母胎となり続けているオリエント世界において、ちょうど大帝国が消滅し、再び勃興する端境期に位置している。ギリシア都市国家という辺境世界の小国の集まりの中で、アテナイが民主化に成功し、そのことで軍事的にも急速に力をつけていくことが可能だったのは、外患の比較的少ないこの穏やかな時期に恵まれたからだと言える。別の言い方をすれば、ペルシア戦争

においてアテナイがギリギリのところでも勝利をもぎ取ることができたのは、民主化に間に合ったからなのである。本稿は、アテナイにおける民主政の成立の経緯と、ペルシア戦争に至る歴史的過程を詳らかにすることで、ペルシア戦争におけるアテナイの勝利の人類史的意義を明らかにすることを目的としている。

1. アテナイの発展と貴族政の揺らぎ

1. 1. 重装歩兵の密集方陣の戦いの登場

ポリスが成立してからおよそ 100 年間は、戦争は、自由農民を率いた騎馬の貴族による散開戦術によって戦われており、一騎打ちの戦いという個人戦であった。初期のポリスはどこでも貴族が政治の実権を握るといふ貴族政であったのは、軍事力の担い手もっぱら貴族であったからである。

フィンリーによれば、紀元前 700 年直後の壺絵に重装歩兵の密集方陣の戦いが描かれている。ギリシア世界では武装自弁が原則であり、自分で鎧や兜や装具を調達しなければならなかったので重装歩兵の担い手となったのは、相対的に富裕な自由農民⁽⁷⁾であった。戦闘シーズンは当然のことながら農閑期となる。農閑期は、地中海性気候のギリシアにおいては日中雲ひとつなく気温が 40 度近くにまで上がる夏であった。太陽がジリジリと照りつける中で、青銅器の兜と鎧という重装備で戦うというのは、ある意味不合理である。にもかかわらず重装備になったのは、その主力が、戦争のアマチュアである農民だったからであろう。アマチュアである以上、当然のことながら攻撃よりは防御に力をいれざるをえない。その結果が、体重の半分にもなるような重装備であった。装備が重くなればなるほど、機動力は落ちる。貴族が行ってきたような一騎打ちの戦いなど出来るわけがない。重装備は、散開戦術による一対一での戦いにはそもそも不向きなのだ。であれば重装備のアマチュアの戦士という条件に応じた戦い方というのが、要請される。それが、密集方陣による戦いである。密集方陣は、奥行き（縦）が 5 列ないし 8 列、横幅が 100 人から 200 人、多い場合は 1000 人からなる歩兵の集団が一丸となって戦う戦術である⁽⁸⁾。重装歩兵の

螞螂の斧（的射場）

密集方陣による戦いは、規律された軍隊による集団戦であるが、やがて騎馬の貴族が農民戦士を率いて戦う散開戦術を圧倒するようになると貴族もまた馬から降り、密集方陣に組み込まれていく。

では、いかなる理由が、自由農民の重装歩兵を生み出すことになったのだろうか。ウェーバーは、『古代社会経済史』の中で次のように述べている。

一方では農業の販売の機会が発展し、他方では軍事技術が変化する。その結果、甲冑武装する軍務にたずさわらうる経済的能力をもつ土地所有者の範囲は拡大されることとなった。また、外部からたえず脅威をうけているため、武装を自弁し戦争を遂行する経済的能力あるひとびとのあらゆる層の武装力をもいやでもおうでも徴用せざるをえなかった⁹⁾。（ウェーバー『古代社会経済史』）

重装歩兵が登場する要因として、「外部からたえず脅威をうけているため」武装自弁の農民戦士を動員せざるをえないというのは分かりやすい理屈である。防衛のための軍事力を貴族だけでカバーできなくなったということであろう。それよりも重要なのは、軍事力を提供しうる存在としての農民の成長についての指摘である。ウェーバーは、「農業の販売の機会が発展」していると述べているが、これは、農民が自給自足の段階を脱し、余剰生産物の販売、あるいは換金作物の生産販売の段階に入っていることを示唆している。つまり農民が単なる生産者としてだけでなく、農業生産物を商品として販売し、そこから利益を得ていることが指摘できるのである。そもそも重装歩兵の武具甲冑は、農民の年収の半分ほどの費用がかかった。多くの農民が商品の売買に従事し、そこから利益を得ているということを前提にしなければ、武具甲冑の調達などではできない相談である。

牧畜を主としていたギリシアの農業が変化するのは、鉄器の登場によってである。土地を耕すための道具としての鋤の先端部分、つまり、土を掘り起こす鋤先に鉄が使われるようになった。鋤先に鉄が使われたことで、それまでの木製の鋤では難しかった粘土質の重い土壌の土地にまで耕作地を広げることが可

能になった⁽¹⁰⁾。それは古代ギリシアの農業形態を一変させるに十分であった。牧畜が主だったギリシア世界で、小麦だけでなく、ぶどうやオリーブを栽培できるようになったのである。さらにぶどうから葡萄酒が作られ、オリーブからオリーブ油が作られ、それらが商品として売られるようになったのだ。

集約化された穀物畑、ブドウ園、果樹園は、今では価値が上昇しつづける私有財産であり、ますます増大する人口をやしなう資源となった。山の多いギリシアには抜け道はいたるところにあるので、侵略しようと思えば、たいていは侵入できた。もちろん、急襲、まちぶせ、略奪攻撃はあたりまえのことだった。国土を防衛するために土地をもたない無産者やよそ者を駐屯兵として無期限に雇って隘路を守らせたり要所を要塞化したりするよりも、重装武装した農民自身を最大限動員した方が、より安上がりで、より確実であった。つまり、重装歩兵による戦争は、要塞化とか隘路への駐屯兵の配置にくらべれば、完全に意味をもつものとなってきたのである。

重装歩兵の密集方阵での戦いは、多くの人数を必要とした。したがって、重装歩兵の軍隊は、適当な甲冑と武器で武装できる者をみな入れた。武具を調えるには中程度の富を必要とし、中層から富裕層の農民が重装歩兵となった。これは成人男子の富裕な上位5分の1から3分の1に当たる。生まれによって狭くではなく、富によって広くというこの資格選定こそ、革命的だった⁽¹¹⁾。

1. 2. ソロンの改革

貴族という生まれによって軍隊を構成した段階から、武装自弁できるだけの富を持つものはすべて動員した重装歩兵への移行は、ポリスの軍隊の主役が貴族から武装自弁の農民戦士に移ったことを意味している。密集方阵の戦いは、重装歩兵の各々にこの集団に対する高度な忠誠心を要求した。それは、自らが属するポリスに対する高い忠誠心、帰属意識にもつながるものであった。今や彼らが政治の主体として国政の舞台に踊り出てくるのは、時間の問題だった。貴族はもはや都市の自由の第一の守護者でなくなり、彼らの権力掌握は弱くなってきていた。戦場で支配的な力をもっている武装自弁の農民を、公的生活

から締め出すことは、やさしいことではなくなっていた⁽¹²⁾。平民たちの経済的な力の上昇は、重装歩兵の密集方陣の成立と結びついて、彼らの国政参加への要求を生み出していたのだ。それだけでなく、本来、隷従の徒でなかった平民たちは、一段とその政治的発言力をつよめ、失政の一つ一つに鋭い批判と不満の声を放つようになる。

貴族と平民の軋轢が表面化した最初の事件が、紀元前 632 年のキュロン (Kylon) の叛乱である。アテナイ貴族であったキュロンは、「オリュンピア競技の優勝者であり、血統も良く、有能であった⁽¹³⁾」ので、民衆の人気が高かった。キュロンはこの民衆の人気と支持をあてにし、そして、メガラの僭主テアゲネスの女婿であったのでメガラの武力を後ろ盾にして武装蜂起を企てた。一味の者たちとともにアクロポリスに立てこもり、クーデタによってアテナイ初の僭主になろうとした⁽¹⁴⁾のである。僭主というのは、非合法的な手段に訴えて政権を獲得した者、もしくは、ある社会において慣習的に合法的と認められている枠をこえて自己の政治権力を行使した者である⁽¹⁵⁾。

キュロンの叛乱は挫折したが、ドラコン (Drakon) の立法というアテナイにおける最初の大きな政治改革をもたらした。貴族と平民との対立は予断を許さぬものとなっており、とりわけ裁判に対する貴族への不満は大きかった。裁判権を貴族が独占し、法が不当に歪められていると感じていた民衆は、法の成文化を要求していた。それに応えたのが、ドラコンの立法である。ドラコンは、紀元前 621 年、慣習法を集成しこれに改正を施し公布した。血で書かれたと言われるほどの厳罰主義の法であったが、それでも法が成文化され、公開されたことの意義は大きかった。なぜなら、成文法は、「それが存在するだけで批判と改変を可能⁽¹⁶⁾」にするからである。一般民衆の国政参与に関しては、アリストテレスは『アテナイ人の国制』で、このドラコンの時代に「参政権は自費で武装し得る人々に与えられていた⁽¹⁷⁾」と述べている。中産農民を中核とする重装歩兵が軍事面で大きくなってきていることの反映であろう。貴族たちは、武装自弁して重装歩兵軍に参加できる農民層の国政参与への要求を受け入れたということである。

しかしながら、ドラコンの立法によってもアテナイの政情は安定しなかった。貴族と平民の対立抗争は一層激しくなっていた。民衆は、貴族からの「借財には誰でも身体を抵当⁽¹⁸⁾」にしており、払うことができなければ債務奴隷に落とされていたからである。自由民から奴隷に転落していたのである。ソロン (Solon, B. C. 640-560) が貴族と平民の調停者にして立法者として期待されて登場するのは、このような状況においてであった。「民衆は貴族に反抗して起った。抗争は激しく行われ、人々は互いに久しく反目を続け」ていたので、「彼らは合意の上で調停者として、またアルコンとしてソロンを選び、彼に国事を委ねた⁽¹⁹⁾」。紀元前 594 年、ソロンが筆頭アルコンに選ばれた。

ソロンの改革の意図は、ウェーバーによれば、「国家の防衛力という政治的関心」から、「債務におちいった農民と妥協しようという努力⁽²⁰⁾」であった。「重装歩兵の装備と戦術は、それまでまざりあっていたホメロス風の旧い個人戦的な装備と戦術をふるい落として、しだいに重装歩兵固有のものへと純化」してきていた。「密集隊の規模も大きくなって本格的なものへと発展⁽²¹⁾」してきていたのである。つまり、重装歩兵の密集方陣の戦術が一般化し、アテナイポリスの軍事力において武装自弁できる農民の比重はますます大きくなってきていたのである。であれば、軍の中核をなす農民の債務奴隷化を無視できる訳はない。農民が債務奴隷に陥ることは、それはそのまま国防力の低下となるからである。筆頭アルコンとなったソロンは、「身体を抵当に取って金を貸すことを禁止して民衆を現在のみならず将来も自由であるようにし、またいろいろの法律を定め公私の負債の切棄てを行った⁽²²⁾」。つまり、「土地および人身を担保にした債務の免除」によって徹底的に農民に譲歩し、そして、「国外に売却されたアッティカの債務奴隷の買い戻し」を行った。それは、アテナイが「国家の軍事力の基礎となる重装歩兵軍を維持する⁽²³⁾」という明白な意志表明であった。

「重荷おろし」と並ぶソロンの大きな改革が、民衆の政治参加を大幅に認めた「財産制」(timokratia) の施行である。それは、アリストテレスによれば以下の様なものであった。

蠅螂の斧（的射場）

人々を財産評価により五百メディムノス級と騎士^{ヒツベウス}と農民^{ゼウギデス}と労務者^{テス}の四級に分かった。そして彼は9人のアルコンや財務官や契約官や11人やコラクレタイのような役は各級の財産評価に応じて分かち与え、五百メディムノス級や騎士や農民から任じた。これに反し労務者級に属する者は民会と法廷に参与させたのみだった。⁽²⁴⁾

（アリストテレス『アテナイ人の国制』第7章）

このソロンの財産制が意味したのは、ウェーバーによれば、「ドラコンは、すべての経済的に武装能力のあるひとびとに完全市民権をゆるし、ソロンは農民級以下のひとびとにも完全市民権をゆるし⁽²⁵⁾」たということであった。市民を「財産」によって4つの階級、「富裕級」「騎士級」「農民級」「労務者級」に分けたのだが、それは、年収の大きさであり、上から順に、500、300、200石であった⁽²⁶⁾。そのうち第一級は有力貴族、第二級は中小貴族、第三級は中層農民、第四級は下層農民と商工業者であった。武装自弁で重装歩兵として今やポリスの軍事力の中核をなす農民層が、その数においては圧倒的に多数である以上、彼らに対して貴族が妥協し、譲歩せざるを得なかったのも頷ける⁽²⁷⁾。貴族だけでなく、第三級の中層農民も国政に参与できるようになったことは画期的なことであった。

この改革は、貴族政の解体の始まりを意味した。なぜなら生まれの高貴さによってのみ政治の要職につく権利をもつと考えられるのが貴族政であるのに対して、生まれではなくその財産によって要職につける可能性を開いたからであり、一般民衆たる農民層にも政治参与の機会を与えたからである⁽²⁸⁾。

1. 3. ペイシストラトスの僭主政

ソロンの改革による「重荷おろし」は、債権者であった貴族に経済上の大打撃を与えた。貴族は、それをソロンの裏切り行為と考えた。それゆえ「貴族の多数は負債の切棄てによって彼に敵意を懐いて」おり、また「彼が再び旧制にかえすか、僅かの変革に止めるものと思っていた⁽²⁹⁾」貴族にとって、ソロンが農民にまで国政参与を認めたことは、貴族政を原理的に否定するものであ

り、明らかに譲歩のしすぎであった。他方、「彼が一切を再配分すると思っていた⁽³⁰⁾」下層農民にとっては、負債の切棄てだけでは不十分であった。既存の負債の帳消しの恩恵に与ったとしても、生活の安定が確実でない限り、再び債務に苦しむことになるであろう状況にあることには変わりはなかったからである。したがって、下層農民は、改革の不徹底に対して不満の声を増大させていた⁽³¹⁾。

ソロンはかかる状況の中で、「いずれにも反対し、己の欲する側に与して僭主となることもできたにかかわらず、祖国を救い、また最良立法を行なって双方から憎まれる道を選」び、「商業と見物とを兼ねてエジプトへの旅⁽³²⁾」に出かけ、10年のあいだアテナイを離れていた。このソロンの不在の時にアテナイ国内での権力闘争は活発になり、地域を根拠にした三つの党派が争っていた。アリストテレスによると、その一つは「海岸の人々」のそれでアルクメオンの子メガクレスがこれを率い、この派は特に中庸の政体を求めていると思われた。次は「平野の人々」の党で寡頭政治を求め、リュクルゴスが彼らを率いていた。第三は「山地の人々」のそれで、ペイストラトス（Peisistratos、前600年頃-前527年）が「その頭に立ち、彼は最も民主的であると見えた⁽³³⁾」。ペイストラトスは、父ヒポクラテスが伝説のピュロス王ネストルの末裔、母はソロンの母方の従姉妹という名門の出であり⁽³⁴⁾、彼自身ソロンと親しいつきあいをしてきた。

ソロンの改革は、ポリスの「民主化」というにはほど遠いものの、それまで政治から疎外されていた一般民衆を政治の場に引き出し、政治に馴染ませてきていた。民衆にとっての政治の舞台は広場^{アゴラ}であり民会であった。ペイストラトスは、この広場^{アゴラ}や民会にいる民衆を味方につけ、政権を奪取した。つまり、こうである。かれは、「自分で自分の体と驢馬を傷つけて」広場^{アゴラ}に車でのりつけ、「敵方が田舎へ行こうとした自分を襲って殺そうとしたが、その手を逃れてきたところだ⁽³⁵⁾」と民衆に訴えたのだ。この芝居じみた訴えが功を奏して「多勢がそれに応じて憤り、叫び出⁽³⁶⁾」すような事態が生じた。ペイストラトスは民会を招集することに成功し、民会の決議で「棍棒持ち」と呼ばれる護衛

螞螂の斧（的射場）

兵を得た。合法的に私的な軍隊を得たのである。彼は「これをもって民衆に抗して立ち、〔ソロンの〕法律制定ののち、32年目のコメアスのアルコンの年にアクロポリスを占領⁽³⁷⁾」し、僭主となった。

ペイストラトスは、この後2回もアテナイから追放されるが、11年の亡命生活の後、各地から軍資金を集めたうえで政権奪回の軍事行動に出た⁽³⁸⁾。「アッティカに入って最初に占領した町は、マラトンであった⁽³⁸⁾。」この地がもともとペイストラトスの本拠地であったからである。呼びかけに応じて近隣の村々やアテナイ市から同土が集まり、パレネの戦いで反僭主派の貴族政力を粉砕して3度目の僭主返り咲きに成功した。独裁権力を確固としたものにするために「強大な護衛部隊を設置⁽⁴⁰⁾」した。もはや何者にも妨げられることなく終生僭主の座に留まり続けた。

ペイストラトスが最初に僭主になった翌年の紀元前560年には、リュディア王国にクロイソスが即位した。クロイソスは、イオニア諸国を武力によって支配下に治め、宗主国となった。14年間イオニア諸国を支配したが、ペイストラトスがマラトンに上陸した紀元前546年に、このリュディア王国は新興国ペルシアによって滅ぼされた。

ペイストラトスの僭主政は、基本的にソロンの国政をほとんどそのまま踏襲したものであった。ソロンの改革の最大の目標は中小農民層の再建にあった。中小農民の多くを富裕者への隷属状態から救い出し、以後ふたたびそのような状況に陥らないよう、制度的な歯止めを設けたところに、ソロンの改革の意義があった。ペイストラトスがとくに気を配ったのは、この中小農民の処遇である。有力貴族たちの覇権争いも、中小農民層の不満をいかにして吸い上げ、その力を政権争奪の手段として組織するかに、勝敗の帰趨はかかっていたといつてよい。党争を克服し、僭主政を維持するためにペイストラトスがとるべき政策は明らかであった。そもそもペイストラトスの勢力の基盤は、かれら民衆にあったからであり、中小農民の保護育成は、僭主ペイストラトスに課せられた、いわば歴史的任務であった。古典期アテナイ市民団の中核たるべき中小農民層は、ペイストラトスの一連の施策によってその地

歩を確立した、といっただいであろう⁽⁴¹⁾。

ペイストラトス時代に中小農民層を主体とする村落自治がアッティカ各地に根を下ろした。これまで公務に携わることからまったく排除されていた多くの人びとを政治に参加させた⁽⁴²⁾。それは、実質的にはソロンの改革の一步先をゆくものであった。つまり、ソロンによって形式的には完全市民となり、国政参与の権利を授けられていた中農層は、この自治の経験を通じて政治的に覚醒したのである。ギリシア史の世界的権威ポール・カートリッジは、「ペイストラトスの父子の最大の功績は」、「決して無意味ではないレベルまで、より広い階層の住民による日常的な政治参加を推進したこと⁽⁴³⁾」にあると述べている。ペイストラトス父子の僭主政は、結果として「古典期の「イソノミアの都市の出現を準備⁽⁴⁴⁾」したのである。

ペイストラトスの統治は、「平和を促し静謐を維持⁽⁴⁵⁾」したものであった。つまり、前7世紀後半のキュロンの反乱から6世紀前半のソロンの改革を経て収まらなかったアテナイ国内の動乱を、ようやく鎮定したのである。ポリスの病と言われる「スタシス」という内紛が、ペイストラトスの独裁によって収まったのである。アテナイは、平和の中で商工業も盛んになり国力もようやく充実してきていた。黒絵式のアッティカ陶器がコリント式の陶器に代わってギリシア世界を制覇するにいたる⁽⁴⁶⁾。ペイストラトスは、ラウレイオン銀山の銀によって貨幣の鑄造を盛んに行い、それまでの名門貴族の種々の紋章が刻まれた貨幣を、アテナイ国家のシンボルであるアテナ神とふくろうを打刻した新しいタイプの貨幣に取り替えた。この新しいアテナイの貨幣は、遠く海外でも流通した。増大した財政力を背景に、ペイストラトスは、アクロポリスをはじめとする中心市アテナイの整備と美化とに着手する。盛んに大規模な土木工事を行ってアテナイ市を整備し給水設備を整えた。さらにはパルテノン神殿の建築も行った。それは、ペイストラトス自身の威信を高めるとともに職人たちに仕事を与え、市民生活を潤わせることになった。これらの土木事業は経済の成長を刺激しアテナイの繁栄をもたらすことになったのだ⁽⁴⁷⁾。

ペイストラトスはまた、芸術の良き理解者であり保護者でもあった。アテ

ナイの守護神アテナの生誕を祝うパンアテナイア祭を拡充し、国を挙げての最大の宗教行事の地位を高めた。劇の上演をとまなう大ディオニュシア祭を創始したのもペイシストラトスである。文学や芸術を奨励し、ホメロスの二代叙事詩を初めて結集・編纂させた⁽⁴⁸⁾。ペイシストラトスのこれらの文化事業は「住民のあいだにアテナイ人としての—あるいはアッティカ人としての—強い文化的一体感⁽⁴⁹⁾」をもたらした。

アリストテレスが、ペイシストラトスは「穏和に、また僭主的というよりむしろ合法的に国政を司った⁽⁵⁰⁾」と述べているように、様々な施策によってアテナイは繁栄したので、その治世はアテナイの黄金時代と謳われるようになる。市民のあいだで特に評判が良かったのは、ペイシストラトスの「性格が民主的で博愛であった点」と「万事法に従って治めて行き、決して自己の利益を計ることはなかった⁽⁵¹⁾」ということだった。

そもそも僭主政というのは、新しい政治現象であった。前7世紀から前6世紀のギリシア各地で、世襲の支配権を持たず、権力に対する法の制限をも認めない独裁者による政体が出現した。この独裁者は英語では「タイラント」(tyrant)であるが、ギリシア語では「テュランノス」(turannos, 僭主)という語が用いられた。新しい政治現象を表現するにふさわしいと考えられたのである。「テュランノス」という語は、ギリシアで生まれたものでなく、外国からの借用語であるとされており、まだ定説はないが、一般にリュディア起源と推測されている。外来語として借用するきっかけとなったのは、前7世紀初頭にサルディスで王位を篡奪し、「法ではなく武力によって国を統治した最初のリュディア王ギュゲス⁽⁵²⁾」の存在であった。莫大な富と政治上の権力を握ったギュゲスは、ギリシア人の眼にとっては典型的なテュランノス(僭主)として映じた⁽⁵³⁾。紀元前600年前後のミレトスにはトラシュブロスという僭主がいたと見られている。「テュランノス」(僭主)は、元来は「バシレウス basileus」(王)と同義語で、不快な感じを伴う語ではなかった。実際僭主たちはしばしば自らを「王」と読んでいたのだ。このような新しい政体である僭主政は「ギリシア諸都市の歴史における重要な一契機として現われ、古い

貴族社会の破壊に貢献⁽⁵⁴⁾」した。

しかしながら、結局僭主たちは、彼らがとって代わった貴族たちと同じように暴君となり圧政的であることが分かった。アリストテレスは『政治学』の中で僭主政を、「国民共同体に対して主人的権力を振う独裁制⁽⁵⁵⁾」であると定義しているが、まさにこの定義そのままに「テュランノス」という言葉は、嫌悪感を催すようないやなニュアンス持つようになった⁽⁵⁶⁾のである。かかる事情は、アテナイでも同様であった。ペイシストラトスの死によってアテナイの僭主政はおそらくその歴史的役割を終わっていたのである。長子ヒッピアスが僭主となり、弟ヒッパルコスとともに統治した。「父の死後およそ17年間僭主政を維持⁽⁵⁷⁾」したが、男色のもつれから紀元前514年に弟が暗殺された。それ以来、暴政に転じ、大勢の市民を処刑・追放した。怨嗟の聲が高まり、紀元前510年、遂に一族もろともアテナイから放逐された。

僭主一族の追放後の騒乱を経て、紀元前508年のクレイステネスの改革によってアテナイは民主政の基礎が作られた。紀元前499年、イオニアの反乱が起る。クレイステネスの改革からまだ10年も経っていなかった。反乱の首謀者アリスタゴラスの支援要請にアテナイ民会は応えたが、その理由はおそらくイオニアの諸市が僭主政を廃し民主政を樹立したことにあったのではないだろうか。アテナイから追放された僭主ヒッピアスは、亡命生活の中で復権を画策してスパルタを中心とするペロポネソス同盟と結んでいた。スパルタの支援が当てにできなくなるとペルシアの宮廷に入り込み、僭主への返り咲きを狙ってマラトンに上陸したペルシア軍に帯同していたのである。

2. イオニアとオリエント世界

2. 1. イオニアの植民都市ミレトスとミレトス学派

ペルシア戦争のきっかけとなったのは、イオニアのギリシア人植民都市がペルシアに対して起こした反乱である。イオニアというのは、現在のトルコのアナトリア半島のエーゲ海沿岸部の地方を指す。紀元前1200年のカタストロフィ

蠅螂の斧（的射場）

で落ち込んだ「暗黒」時代からギリシア世界がようやく脱し始めたのは、紀元前 800 年頃のことである。ギリシアの各地でポリスが形成されるようになったが、それとほとんど時期を同じくして、多くのギリシア人がギリシア本土を離れて地中海沿岸の各地に移り住み、ポリス（都市国家）を形成した。イオニアのギリシア人植民都市もこの頃に形成されたものである。

イオニアは、オリエント世界とギリシア世界との十字路口に位置しており、交易によって栄えた。イオニア人は、東方文化の文化遺産をだれよりも十全に活用し、発達させた。アルファベットはレバノンのフェニキア人から借用し改良したものである。数字は、現在のイラク南部のバビロニア人から借用した。貨幣制度は貨幣経済の発祥の地と言われる隣国リュディアから借用⁽⁵⁸⁾したものであった。

イオニアの反乱の発火点になったミレトスは交易で栄え、イオニア地方の中心都市であった。ミレトスは、アルカイック期の「ギリシア都市のなかで最も繁栄していたもののひとつ⁽⁵⁹⁾」というだけでなく、文化面においても最も先進的かつ冒険的な都市のひとつだった。外に向かって開かれた活力に満ちた環境は、知的創造のこのうえない温床ともなっていた。ヨーロッパ哲学史上最初の重要な 3 人の人物—タレス (Thales, 前 624 年頃 - 前 546 年), アナクシマン드로ス (Anaximandros, 前 610 年頃 - 前 547 年), アナクシメネス (Anaximenes of Miletus, 前 585 年頃 - 前 525 年)—を産んだのが、このミレトスなのである。それまでしばしば戦いを交えた隣国のリュディア王国と和平を結び提携を深めたが、このことがバビロニア、アッシリア、フェニキア、エジプトなどのオリエント世界の先進諸国との文化交流を促進させたといわれている。リュディアは古代東方文明の前線基地であったからであり、オリエント世界の先進的な自然に関する経験的知識や宇宙観が、リュディア王国を媒介にしてこの地にもたらされたからである⁽⁶⁰⁾。3 人の最初の哲学者たちが、知的刺激に富むミレトスに誕生したのもゆえないことではなかった。

ヘロドトスは、タレスについて印象的なエピソードを紹介している。

ある合戦の折、戦いのさなかに突然真昼から夜になってしまった。この時の日の転換は、ミレトスのタレスが、現にその転換の起こった年まで正確にあげてイオニアの人々に予言していたことであった。リュディア、メディア両軍とも、昼が夜に変わったのを見ると戦いをやめ、双方とも嫌が上に和平を急ぐ気持ちになった⁽⁶¹⁾。(ヘロドトス『歴史』巻1の74)

リュディア王国とメディアが戦っている時に、タレスが皆既日蝕を予言したという話である。タレスが、紀元前585年に小アジアで起こった皆既日蝕を予言することができたのは、F. M. コンフォードによれば、バビロニアの神官が何世紀にもわたっては諸惑星の運動を記録していたからであった。バビロニアの神官にとって天体観測の実際的動機をなしていたのは、人間界の出来事を予知するためだった。諸惑星の動きが人間界の出来事を支配しているという占星術のためであった⁽⁶²⁾。占星術のような迷信や呪術的行為というのは根深く、周知のようにどこにおいてもしぶとく残り続けている。これに対して当時の西洋文明の頂点に位置したイオニア諸国では、農民層においてさえも呪術的行為を脱却してしまっただけの人々がいた⁽⁶³⁾。このような知的風土の中で育ったタレスは、そもそも天体運動の観測が占星術のためであるというバビロニアの神官の意図を無視し、その天体運動の観測の結果だけを取り出しその合理的帰結として皆既日蝕を予言したのである。タレスは、占星術のための天体運動の観測を天文学に変えたのである。

タレスについて、ヘロドトスはもうひとつエピソードを紹介している。それは、リュディア王クロイソスにまつわるものである。「どうしても軍隊を渡河さすべきかとクロイソスが困惑していたところ、陣営に合わせたタレスがクロイソスのために、軍の左手を流れていた河を右手にも流れるようにしたという⁽⁶⁴⁾。」つまり、運河の掘削によって軍隊が河を渡れるようにしたというエピソードである。ここには、大地の存在形態についての考察から運河の開削を提案するなどの個別な事象にかかわる合理的思考、実践的思考が見られる。

タレスには、このような個別の事象にかかわる合理的思考をさらに超えて宇

宙万有を全体としてその視野のうちに置き入れ、統一的に説明し理解しようとする思考が現れてくる⁽⁶⁵⁾。それまでは神話的説明がなされていた世界の起源について、合理的説明を初めて試みたのである。すなわち彼は万物の根源（アルケー）を水と考え、存在する全てのものがそれから生成し、それへと消滅していくものだと考えた。「水」は、あらゆる生命にとって不可欠なもの、可変性に富んだもの、普遍的なものであるので、複雑で多様な自然現象の説明にとってきわめて有効である。宙万有は、この有効な説明原理によって、統一的に全一的に了解される⁽⁶⁵⁾ことになった。アリストテレスは、宙自然の生い立ちについて例えばヘシオドスの『神統記』のように神話や超自然的説明にたよる「神話語り人（テオロゴイ）」に対して、自然に対して合理的な説明を試みる人たちを「自然学者たち（ピュシオロゴイ）」と呼んだ⁽⁶⁷⁾。アリストテレスによれば、ここから哲学が始まったのである。だからこそ、アリストテレスは、タレスのことを「知恵の愛求〔哲学〕の始祖⁽⁶⁸⁾」と述べている。タレスは古代ギリシアに現れた記録に残る最初の哲学者であり、イオニア自然哲学のミレトス学派の始祖となった。

タレスよりもおそらく10年ほど年若いアナクシマンドロスは、タレスが書物を著さなかったと言われるのに対して、著作し、そのうちの数行が今日に伝えられている⁽⁶⁹⁾。タレスとともに最初の哲学者とされるが、万物の根源は「無限なもの」（ト・アペイロン）であると論じた。有限なもの（ペレス）はこれより生じ、寒熱をもち、罪によって滅び無限なものに再び帰するとする。この発想の画期的なところは、タレスが「水」という自然界に存在する要素を用いて世界の起源を説明しようとしたのに対し、「火」や「水」といったあらゆる対象物の根源を抽出するために「無限なもの」を概念化したことである⁽⁷⁰⁾。

タレス、アナクシマンドロスとともにイオニア自然哲学を代表するのが、アナクシメネスである。彼は、タレスやアナクシマンドロスより一世代下であり、アナクシマンドロスの弟子であった。彼は、万物の根源は空気（氣息、pneuma）であるとした。死人は呼吸をしないことから、息は生命そのものであると古代ギリシアでは考えられていた。そこでアナクシメネスは、ちょうど息が生命を作

るように、空気が世界を作るものと考えた。空気は薄くなるにつれて熱くなり、最も薄くなると火となる。逆に濃くなるにつれて冷たくなって水になり、更になくなる土や石になる、とした。また、大地は大きな石の円盤で、木の葉が風に舞うように空気に乗って安定しているものとし、太陽や月など宇宙のその他のものは、この大地円盤の土が希薄化する事によって生じているものだ⁽⁷¹⁾、としたのである。

ミレトス学派の3人が活躍していたまさにこの頃、紀元前560年に隣国リュディアにクロイソスが王位に即位した。35歳であった。クロイソスの登場によって、ギリシア人の世界は大国の権力闘争の渦の中に巻き込まれていく。ヘロドトスは、このクロイソスとギリシア人の関係について次のように書く。

クロイソスはリュディア人で、アリュアッテスの子として生まれ、ハリュス河以西の諸民族を独裁的に統治していた。…このクロイソスが、われわれの知る限りでは、ギリシア人あるいは征服して朝貢を強い、あるいはこれと友好関係を結んだ、最初の異邦人であった。すなわち彼は、イオニア人、アイオリス人およびアジアに住むドーリス人を征服する一方で、ラケダイモン（スパルタ）とは友好関係を結んだのである。クロイソスの統治以前は、すべてのギリシア人が自由であった⁽⁷²⁾。（ヘロドトス『歴史』巻1の6）

「クロイソスの統治以前は、すべてのギリシア人が自由であった」とヘロドトス書いているように、それ以前は、イオニアの諸都市は侵入され掠奪されるということはあっても、他国の支配下に入ることはなく、自由と繁栄を享受していたのである。自由と繁栄こそが、イオニア自然哲学を生み出したものであった。

注

- (1) ヘロドトス『歴史 中』（松平千秋訳、岩波文庫、1972年）巻6の19, 208頁。
- (2) 同書、巻6の32, 215頁。
- (3) 同書、巻5の97, 182頁。

螳螂の斧（的射場）

- (4) ヘロドトス『歴史 上』（松平千秋訳，岩波文庫，1971年）巻1の1，9頁。
- (5) ヘロドトス『歴史 中』巻6の112，306頁。
- (6) 同書，巻6の101，257頁。
- (7) モーゼス・I. フィンレー『古代ギリシア人』（山形和美訳，法政大学出版局，1989年），37頁参照。
- (8) ヴィクター・デイヴィス・ハンセン（遠藤利国訳）『図説 古代ギリシアの戦い』（東洋書林，2003年）65頁参照。
- (9) ウェーバー『古代社会経済史』（上原専禄・増田四郎監修，渡辺金一・弓削達訳，東洋経済新報社，1963年），202頁。
- (10) ウィリアム・H・マクニール『戦争の世界史－技術と軍隊と社会－』（高橋均訳，中公文庫，2014年），41頁参照。
- (11) マイケル・マン，『ソーシャルパワー：社会的な<力>の世界歴史Ⅰ』（NTT出版，2002年），218頁参照。
- (12) A・アンドリュース「都市国家の発達」（H. ロイド＝ジョーンズ編『ギリシア人』（三浦一郎訳，岩波書店，1981年），44頁参照。
- (13) トウキュディデス『歴史 1』（藤縄謙三訳，京都大学学術出版会，2000年），第1巻の126，120頁。
- (14) 同書，同頁。
- (15) 岩田拓郎「アテナイとスパルタの国制」『岩波講座 世界歴史1 古代1 古代オリエント世界 地中海世界Ⅰ』（岩波書店，1969年），531頁参照。
- (16) W. G. フォレスト（太田秀通訳）『ギリシア民主政治の出現』（平凡社，1971年），172頁参照。
- (17) アリストテレス『アテナイ人の国制』（村川堅太郎訳，岩波文庫，1980年）第4章，20頁。
- (18) 同書，第5章，21頁。
- (19) 同書，同頁。
- (20) ウェーバー『古代社会経済史』，215頁。
- (21) 安藤弘『古代ギリシアの市民戦士』（三省堂，1983年），277頁。
- (22) アリストテレス『アテナイ人の国制』第6章，22頁。
- (23) ウェーバー『古代社会経済史』，217頁。
- (24) アリストテレス『アテナイ人の国制』第7章，24頁。
- (25) ウェーバー『古代社会経済史』，224頁。
- (26) アリストテレス『アテナイ人の国制』，第7章，24頁。
- (27) 清水昭次「貴族政の発展と僭主政の出現」『岩波講座 世界歴史1 古代1 古

- 代オリエント世界 地中海世界 I』(岩波書店, 1969年), 472頁参照。
- (28) 伊藤俊太郎編著『人類文化史② 都市と古代文明の成立』(講談社, 1974年), 256頁参照。
- (29) アリストテレス『アテナイ人の国制』, 第11章, 28頁。
- (30) 同書, 同頁。
- (31) 岩田拓郎「アテナイとスパルタの国制」, 472, 530頁参照。
- (32) アリストテレス『アテナイ人の国制』, 第11章, 28頁。
- (33) 同書, 第13章, 32頁。
- (34) 松原國師『西洋古典学事典』(京都大学出版会, 2010年), 1088-1089頁参照。
- (35) ヘロドトス『歴史 上』巻1の59, 47頁。
- (36) プルタルコス「ソロン」『プルタルコス英雄伝 上』(村川堅太郎編, ちくま文庫, 1987年), 144頁。
- (37) アリストテレス『アテナイ人の国制』, 14章, 33頁。この護衛兵の数を, フランソワ・シャムーは300人と推定している(『ギリシア文明』(桐村泰次訳, 論創社, 2010年) 168頁参照)。
- (38) ヘロドトス『歴史 上』, 巻1の61, 56頁参照。
- (39) 同書, 巻1の62, 56頁。
- (40) 同書, 巻1の64, 58頁。
- (41) 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史 ポリスの興隆と衰退』(講談社学術文庫(講談社), 2004年), 183頁参照。
- (42) A・アンドリューズ「都市国家の発達」(H.ロイド＝ジョーンズ編(三浦一郎訳)『ギリシア人』(岩波書店, 1981年)), 48頁参照。
- (43) ポール・カートリッジ『古代ギリシア 11の都市が語る歴史』, 93頁。
- (44) クロード・モセ『ギリシアの政治思想』(福島保夫訳, 白水社, 1972年), 14頁。
- (45) アリストテレス『アテナイ人の国制』第16章, 37頁。
- (46) 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史 ポリスの興隆と衰退』, 184頁参照。
- (47) フランソワ・シャムー『ギリシア文明』, 99頁参照。
- (48) 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史 ポリスの興隆と衰退』, 184頁参照。
- (49) ポール・カートリッジ『古代ギリシア 11の都市が語る歴史』, 93頁。
- (50) アリストテレス『アテナイ人の国制』, 第16章, 36頁。
- (51) 同書, 第16章, 37頁。
- (52) ポール・カートリッジ『古代ギリシア 11の都市が語る歴史』, 56頁。
- (53) 杉勇「四国対立時代」『岩波講座 世界歴史 古代1』(岩波書店, 1969年),

蠅螂の斧（的射場）

282 頁

- (54) クロード・モセ『ギリシアの政治思想』, 14 頁。
- (55) アリストテレス『政治学』(山本光雄訳, 岩波文庫, 1961 年) 第 3 巻第 8 章, 140 頁。
- (56) A・アンドリュース「都市国家の発達」, 45 頁。
- (57) アリストテレス『アテナイ人の国制』, 43 頁。
- (58) ポール・カートリッジ『古代ギリシア 11 の都市が語る歴史』, 50 頁参照。
- (59) 同書, 55 頁参照。
- (60) 廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』(講談社学術文庫, 1997 年), 49 頁参照。
- (61) ヘロドトス『歴史 上』巻 1 の 74, 69 頁。
- (62) F.M. コンフォード『ソクラテス以前以後』(山田道夫訳, 岩波文庫, 1995 年), 18 頁。
- (63) 同書, 29 頁。
- (64) ヘロドトス『歴史 上』巻 1 の 75, 70 頁。
- (65) 廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』, 51 頁。
- (66) 同書, 同頁。
- (67) 同書, 49-50 頁。
- (68) アリストテレス『形而上学 上』(出隆訳, 岩波文庫, 1959 年) 第 1 巻第 3 章。
- (69) 廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』, 52 頁。
- (70) 同書, 53 頁。
- (71) 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史』, 197 頁参照。
- (72) ヘロドトス『歴史 上』巻 1 の 6, 12 頁。